



Indigenous AINU and “Environmental Rights”
in the 1970s Date Struggle
ann-elise lewallen, UC-Santa Barbara



“The ocean is our origin. We are only able to survive because of the ocean, and if the ocean is no longer, that will be the end of us”
-Ainu fisherman Shiïyama Iwao, Usu, 1973



Shiba Takeji

Shiba Takeji

“For us fishermen, who make a living on the ocean, this is a matter of life and death. The power plant is a plankton killing machine. If it is built, it will alter the entire ecosystem”

-Ainu fisherman Shiba Takeji,
Usu, 1973

The “Date Struggle”: Date Thermal Power Plant Construction (1970s)

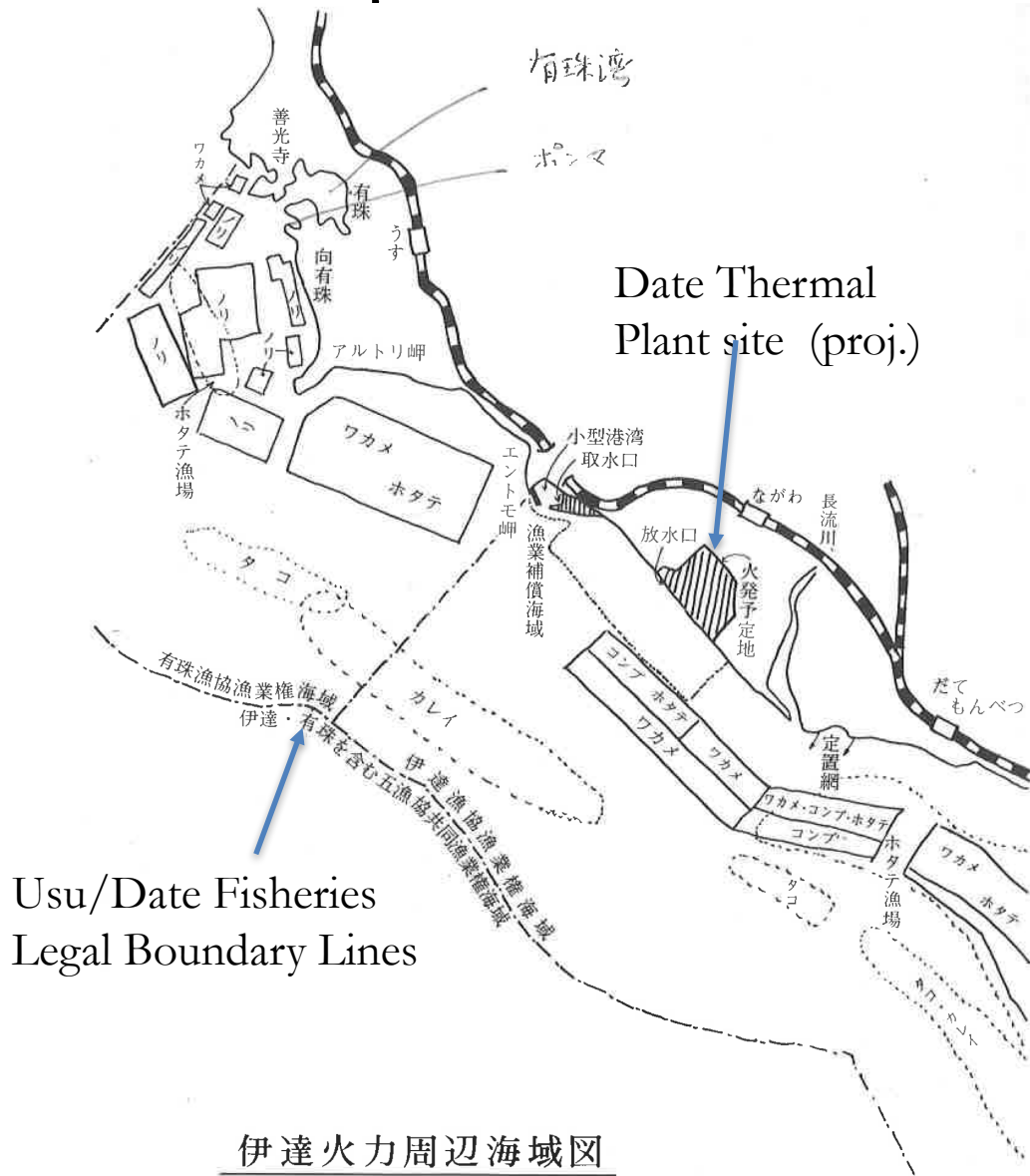
Jan 1970: A 25mw Oil-fired power plant proposed by Hokkaido Power (HEPCO)

→ Jul. 1970: Date Fisheries Union signs MOU, all other fisheries unions remain opposed

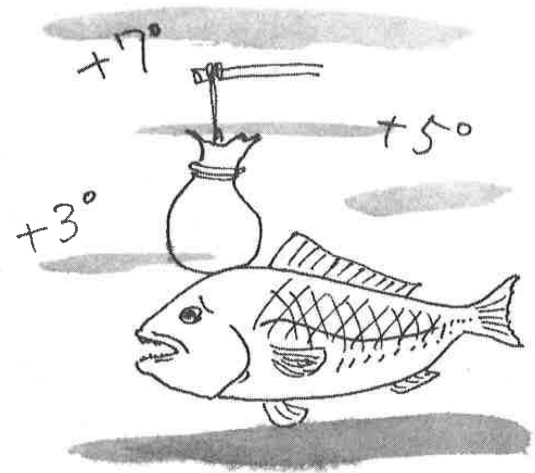
Aug 1970: Upgrade to 2 plants at 35mw/plant (350,000kw) drew citizen outrage:

→ Triggered fears of pollution

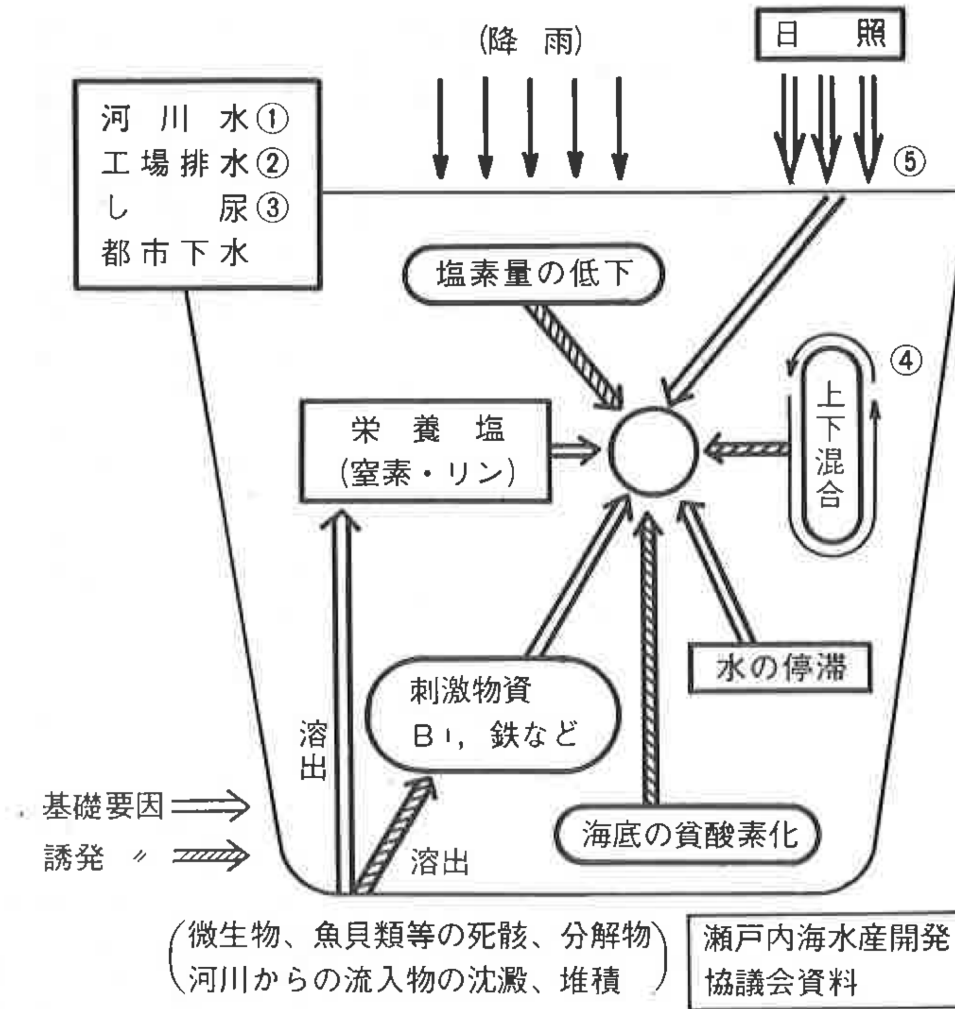
Projected Thermal Pollution



Date Marine Products:
Seaweed: Kelp, Wakame,
 Nori, *Fish:* Scallops,
 Flounder, Octopus



Projected Chemical Pollution



神山茂夫 他 海洋汚染

Model of Industrial Pollution's Impact on the Marine Ecosystem (From Seto Inland Sea Marine Development Council)

Timeline:

Ainu and Civil Society Resistance

- Usu Fisheries Union: 60-80% Ainu fishermen
- Dec. 1970~ Iburi Medical Association, teacher's unions, labor unions, agricultural unions, regional town councils (Sobetsu, etc.) – 40 orgs oppose
 - *Usu Residents Ocean Protection Society (Usu Jūmin to Umi wo Mamoru Kai)*
- July 1972: Date Town Council signs “Pollution Prevention Agreement” with HEPCO

“Environmental Rights” Case

July 1972: Sapporo District Court

“Right to Environment”: Right to a healthy environment to guarantee livelihood.

Plaintiffs: *“We are endowed with the right to enjoyment of a favorable environment in order to maintain health and a comfortable livelihood. This right to environment is a basic human right elaborated in J. Constitution, Art. 13 (Right to life, liberty and happiness) and Art. 35 (Right to personal security)”*

Energy Colonialism rooted in *wastelanding*

Wastelanding – “A colonial project of rendering resources extractable and lands and bodies pollutable” (Voyles 2015: 23)

Timeline:

Ainu and Civil Society Resistance

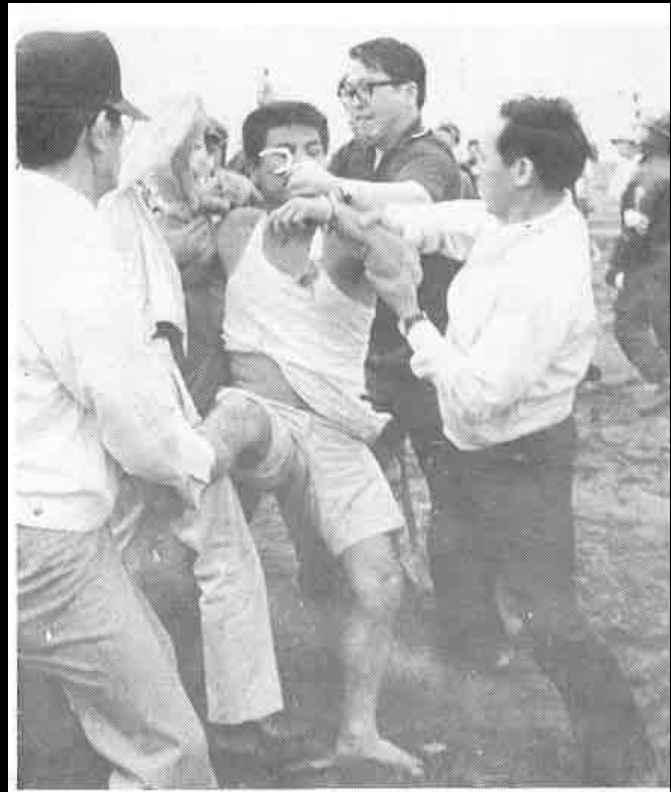
- April 1973~ Construction begins, opposition escalates
- June 1973: Direct Action, sit-ins, demonstrations to block construction. 500 riot police (+ 300 undercover) dispatched.
 - Construction pushed through by force
- Nov. 1978: Power generation commenced



48・6・14の強行着工以後も、反対派・支援団体は繰り返し阻止行動・抗議行動を続けた。

写真は、8月2日工事現場正面ゲート前に座り込んだ支援団体と、それを排除する伊達署員。

北電の工事は常に警察権力に守られている。



48・8・3、漁民から初の逮捕者を出す。この日、北電の工事責任者は工事中止を約束。ところが、午後になって強引に工事を再開。これに抗議した漁民1名が逮捕された。

“I'll be the first one to end up flattened by a bulldozer”
-Sengoku Masashi, Ainu fisherman

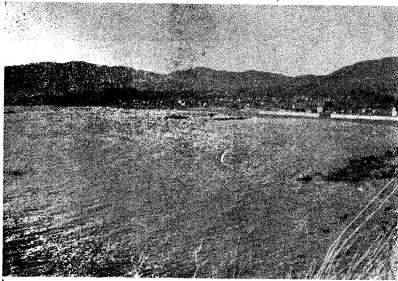
アナタリアイヌ われ人間

原価100円

1973年6月1日

創刊号

アナタリアイヌ刊行会発行



海もよし 山もろつくし 人もよし
ほんに住みよき 有珠コタンかな

創刊号目次

- 一面 伊達火力に反対するアイヌ漁民シンボルマークについて
- 二面 同
- 三面 連載コラム
「エカシ・ツア」を助ねて①
—— 眞塩善蔵・常盤美奈
- 四面 連載コラム「チャレンジャー」①
—— 本多勝一の野教師について
- 五面 ワンポイント「は」は語られた
- 六面 「資料」衆議院予算委員会常任委員 衆議院議員会派常任委員 岡田英次郎×藤原和
- 七面 「詩」「コロッセ」(原イナ)
- 八面 「アヌ」関係諸記事

特集

＝座＝談＝会＝

有珠の海を汚すな!

伊達火力発電所建設に反対するアイヌの漁民たち

海もよし、山もろつくし、人もよし。ほんに住みよき、有珠コタンかな。アイヌの漁民は、有珠コタンを汚すなと叫んでいる。伊達火力発電所の建設は、有珠の海を汚すことになる。漁民たちは、この汚染を許さず、反対の声をあげている。

初めはノンビリと、だが

伊達火力発電所の建設は、有珠の海を汚すことになる。漁民たちは、この汚染を許さず、反対の声をあげている。初めはノンビリと、だが、漁民たちの怒りは、次第に大きくなってきている。彼らは、自分たちの生活を守るために、必死の闘いを挑んでいる。

海が在ってはじめて 生きてきたんだ

海が在ってはじめて、生きてきたんだ。漁民たちは、海を命と見做している。彼らは、海を汚すことが、自分たちの命を脅かすことを知っている。だからこそ、彼らは、海を守るために、必死の闘いを挑んでいる。

Anutari AINU Roundtable on "Date Struggle"

出席者

- 山 巖 (ウタリ協会伊達支部長)
- 川 信吉 (同 幹 事)
- 波 武次 (同 庶 務)
- 柴 和 三 (漁村青年研究会々長)
- 苦 正 志 (実力阻止突撃隊長)
- 千 石 正 志 (実力阻止突撃隊長)
- 平 村 芳 美 (同会・本誌編集長)

「伊達火力発電所の建設は、有珠の海を汚すことになる。漁民たちは、この汚染を許さず、反対の声をあげている。初めはノンビリと、だが、漁民たちの怒りは、次第に大きくなってきている。彼らは、自分たちの生活を守るために、必死の闘いを挑んでいる。」

海が在ってはじめて

海が在ってはじめて、生きてきたんだ。漁民たちは、海を命と見做している。彼らは、海を汚すことが、自分たちの命を脅かすことを知っている。だからこそ、彼らは、海を守るために、必死の闘いを挑んでいる。

海が在ってはじめて、生きてきたんだ。漁民たちは、海を命と見做している。彼らは、海を汚すことが、自分たちの命を脅かすことを知っている。だからこそ、彼らは、海を守るために、必死の闘いを挑んでいる。

何が正義なのか？

伊達火発強行着工される



粘り強いデモ隊の人々

「ちくしよ。ちくしよ」を連発する。機動隊ともみあって倒れ急救車を病院に運ばれ、絶対安静を言い渡された実力阻止突撃隊の千石正志氏だ。ベッドのうえで呻くように何度も言う。

午後六時、夕闇のたれこめた伊達赤十字病院にひとり、ふたりと仲間が見舞う。どの顔も失意の色は隠せない。ガックリと肩を落し言葉少なだ。

六月十四日、早朝五時に北電は機動隊を従え現地入りした。

我らの漁場を守るんだと先号で力強い闘いの模様を語ってくれた有珠のウタリ

有珠漁民の他に全道労働他支援団体を機動隊がゴボウ抜き、ひき抜かれる夫や兄弟を、差し入れのおにぎりを背に不安げに見ていた漁民の主婦や娘さん。逮捕者が出た途端、全道労働が「これ以上犠牲者(?)を出すわけにいかない」としてピケ隊を解きかけたとき、もうがまんできないとばかりかあちゃんも娘さんも最前列に座りこんだ。漁民の生活と生命をかけたピケの中を権力をたてにねじふせるようにその上を通っていく。ブルドーザや資材運搬車が道路をノロノロ走ると、脇の草やぶのなかをピケを解かれた人々が必死に走った。だが追いつくはずもない。道路の両側には機動隊がズラリ。

午前十一時。現場にクイ

隊の側にすわった人々の姿が、北電の機動隊の強行着工に反対する人々の姿を映し出す。

Ainu positioned fishing boats in Date Harbor to block construction





Ainu & Oceans: *Repun Kamuy* as Guardian of the Ocean



*Ainu & Repun Kamuy as
“Environmental Activism”*

Why are “Ainu narratives” absent from the Date Struggle even as the resistance was led by Ainu?

-Hiramura: “Ishi” theory on how settler colonialism nearly destroyed Ainu

-“Becoming Wajin”

- Ripple effect of the Date Struggle into Ainu Rights Movement

Energy Colonialism rooted in *wastelanding*

Wastelanding – “A colonial project of rendering resources extractable and lands and bodies pollutable” (Voyles 2015: 23)

- Not just “Environmental Racism”: Not simply a problem of the disproportionate distribution of environmental toxins

E.g. (Northern Japan)

- Hokkaido: Date Thermal PP, Tomari NPP, Horobetsu Nuclear Waste Long-term Storage (prop.)
- Aomori: Rokkasho Nuclear Waste, Rokkasho Nuclear Reprocessing Plant, Oma NPP

